

第3講：88 「危ないところを」

今回の講座は、次の逸話をもとに信仰体験の意義について考えました。

八八 危ないところを

明治十四年晩秋のこと。土佐卯之助は、北海道奥尻島での海難を救って頂いたお礼に、船が大阪の港に錨を下ろしたその日、おぢばへ帰って来た。そして、かんろだいの前に参拝して、親神様にお礼申し上げると共に、今後の決心をお誓いした。

嬉しさの余り、お屋敷で先輩の人々に、その時の様子を詳しく話していると、その話に耳を傾けていたある先輩が、話をさげ切って、おい、それは何月何日の何時頃のことではないか。と言った。日を数えてみると、全く遭難の当日を言いあてられたのであった。その先輩の話によると、

「その日、教祖は、お居間の北向きの障子を開けられ、おつとめの扇を開いてお立ちになり、北の方に向かって、しばらく、『オーイ、オーイ。』

と、誰かをお招きになっていた。それで、不思議なこともあるものだ、と思っていたが、今の話を聞くと、成る程と合点が行った。」とのことである。

これを聞いて、土佐は、深く感激し、たまらなくなつて、教祖の御前に参上して、「ない命をお救い下さいまして、有難うございました。」と、畳に額をすり付けて、お礼申し上げた。その声は、打ちふるえ、目は涙にかすんで、教祖のお顔もよくは拝めないくらいであった。その時、教祖は、

「危ないところを、連れて帰ったで。」

と、やさしい声でねぎらいのお言葉を下された。この時、土佐は、長年の船乗り稼業と手を切つて、いよいよたすけ一条に進ませて頂こうと、心を定めたのである。

*

この逸話に登場する「土佐卯之助」（敬称略）は、撫養大教会の初代会長であり、天理教の歴史において大きな役割を果たした人物の一人です。

幼い頃に父を亡くした卯之助は、若くして北前船に乗り込み、人一倍の苦勞を重ねて一人前の船乗りになります。その後、明治11年、24歳の時に結婚し、土佐家の婿養子になりました。しかし同年、結婚してすぐに北海道へ向けて出帆した卯之助は、帰阪後に心臓脚気の病に倒れます。この病をたすけられたことが、卯之助の入信のきっかけになりました。

翌明治12年の秋、航海を終えた卯之助は、一年越しの願いを叶えて「おぢば」へ帰りました。このとき「救って頂いた恩を返したければ人を救えよ」と諭された言葉に感銘を受けて、熱心な布教活動を始めます。翌明治13年の航海の際には、北海道に滞在している間に「にをいがけ・おたすけ」に奔走し、北海道布教の先駆けとなりました。

続く明治14年、卯之助は新造船に乗り込み再び北海道へ向かいます。撫養港で初めてと言われた1,300石の大船の実質的な責任者（副船頭）として、店の命運のかかった大事な航海を取り仕切る最中に、卯之助は海難に出合うことになるのです。

*

幕末から明治前期にかけて、北前船の交易は全盛期を迎え、大阪から北海道へは塩や酒・たばこなどの嗜好品（撫養港からは藍玉）が運ばれ、北海道からはニンシや数の子、昆布などの特産品が運

ばれました。撫養港から出帆した帆船は、瀬戸内海を抜けて日本海を北上し、主要な港に寄港しながら北海道へ積荷を届けました。春に出帆した北前船が、「下り」と「上り」の積み荷を入れ替えて戻ってくるのは、秋も深まる頃になります。長期間に及ぶ過酷な航海ですが、これらの交易は莫大な利益を生みました。

この大切な積み荷を一杯に積んだ船が、座礁しかけたのです。濃霧のなかで一度は沈没を覚悟しますが、風向きが変わって難を逃れた船は何とか目的地に到着し、卯之助は大切な船と積み荷を守ることができました。その後、北海道で積荷の入れ替えと商いを終え、帰阪した卯之助は「上り」の積荷を降ろして、すぐに「おぢば」へ帰ります。そして、航海の顛末を語っている最中に、ふいに遭難の日時を言い当てられたのです。しかし、この遭難の危機は「下り」の航海の途上の出来事です。この逸話の日までには、少なくとも半年ほどのタイムラグがありました。

*

遭難の日、教祖は「お居間の北向きの障子を開けられ、おつとめの扇を開いてお立ちになり、北の方に向かって、しばらく、『オーイ、オーイ。』と、誰かをお招きになっていた」と伝えられています。それを見ていた人が「不思議なこともあるものだ」と思い、日付や時間を記憶していたのですから、よほど神々しいお姿だったのでしょう。

風向きが変わって船がたすかったのは、決して偶然ではなかったのです。少なくともこの話を聞いて、卯之助はそう確信したのではないのでしょうか。大難を小難に導かれた暖かい親心に触れて、卯之助は「声は、打ちふるえ、目は涙にかすんで、教祖のお顔もよくは拝めない」ほど感激しました。そして、生涯をこの道に捧げる決意をかためます。

入信の理由は突然の病をたすけられたことでしたが、お礼のために訪れた「おぢば」で布教の動機を与えられて「にをいがけ・おたすけ」に奔走するようになり、この逸話の出来事を契機として、卯之助は腕の良い船乗りとして一目置かれていた人生を捨てて、布教専従の道を歩み始めることになるのです。

とはいえ、人生には紆余曲折がつきものです。残された記録をたどる限り、土佐卯之助の布教人生は苦勞の連続でした。しかし、このときの信仰的な感激が、どのような状況においても彼の心を支えてくれたのではないのでしょうか。

*

人生の最大の難問の一つは、一瞬先の未来です。卯之助が航海を進めた江差沖の海のように、先の見えない濃い霧のなかで、手探りで歩みを進める以外にほかの行路はありません。たとえ、この道の信仰をもとに新たな人生を生きると決意したとしても、一寸先も見通すことができない状況は同じです。

しかし、どのような場面においても親神様のご守護に感謝し、教祖の導きの手を感じて歩む人生は、人生の質においてまったく違うものになるでしょう。たとえ未来を見通すことはできなくても、そこに不安や不足はありません。

土佐卯之助の布教人生は、外面的には苦難の連続でした。しかし、教祖の教えを羅針盤とし、親神様の自由自在のお働きを追い風として進む人生の航路は、内面的には順風満帆だったのではないのでしょうか。たぶん、この逸話に残る信仰の「元一日」の感激が、いつも彼を支えてくれたはずです。だからこそ、撫養の道は大きく広がったのだと思います。